HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学×立教大学 クロストーク ： 大学院生が語るコロナ禍の生活と研究活動・観光現象
Citation	Sauvage ： 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 17, 1-12
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83067
Type	other
File Information	Sauvage17_CrossTalk.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

特集
北海道大学×立教大学
～大学院生が語るコロナ禍の生活と研究活動～

Cross

――主旨説明と自己紹介

斉藤　本日はお集まりいただき、ありがとうございます。今回は、北大の国際広報メディア・観光学院が毎年発行している院生論集『Sauvage』の特集企画として、「コロナ禍での生活・研究活動について」というテーマで院生同士の座談会を企画しました。最初に、参加者のみなさんそれぞれの自己紹介をしていきたいと思います。私は斉藤巧弥（さいとうたくや）と申します。本日はファシリテーターとして参加します。2020 年 3 月に博士課程を修了し、今はポスドクとして北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院に所属しています。研究テーマは――他の参加者のみなさんは観光なのですが――私は性的マイノリティの社会運動などについて研究をしています。よろしくお願いします。それではみなさん順番に簡単な自己紹介をお願いします。

石野　立教大学大学院観光学研究科、博士後期課程 3 年の石野隆美（いしのたかよし）と申します。私の専門は文化人類学で、フィリピンのマニラからの訪日観光者たちのビザ申請やパスポートの申請など、法的文書の作成や手続きについて研究をしています。今日はよろしくお願いします。

中植　同じく立教大学大学院観光学研究科、博士前期課程 2 年の中植渚（なかうえなぎさ）です。専攻は観光社会学で、修士論文では埼玉県入間市にあるジョンソンタウンへの移住を事例に、ライフスタイル・ツーリズムという観光形態が起こっているのではないかということを提起しました、アイデンティティや人々のライフスタイルと観光がどう関わっているのかをテーマに研究をしています。よろしくお願いします。

鈴木　北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の博士後期課程 1 年の鈴木里奈（すずきりな）です。私は故郷観光をテーマに研究をしています。よろしくお願いします。

石野　隆美
（立教大学大学院観光学研究科）

斉藤　巧弥
（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）

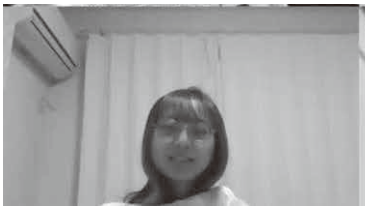
中植　渚
（立教大学大学院観光学研究科）

Talk

岩本　同じく、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の博士後期課程 1 年、岩本晃典（いわもとあきのり）と申します。研究領域は地域社会学と観光学です。九州のサーファーの移住を一つの事例として、観光と移住がどのように交わっているのかという点を明らかにしていこうと研究を進めているところです。よろしくお願いします。

遠藤　北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院の博士研究員をしております、遠藤理一（えんどうりいち）です。今年度の 9 月に博士課程を卒業しまして、今は博士研究員をしています。研究テーマは占領期日本での観光事業と観光旅行ということで、米軍がどう旅行していたのかや、それに対して日本の観光業者がどのように観光事業を行なっていたのかということを資料調査しています。よろしくお願いします。

斉藤　みなさん自己紹介、ありがとうございます。では今回の座談会のざっくりとした趣旨について、私の方から話をしたいと思います。趣旨は 3 点あります。まず 1 つとしては、私たち国際広報メディア・観光学院が発行している院生論集『Sauvage』の内容を充実させていこうというのがあります。これまで修士論文の要旨がたくさん掲載されてきているのですが、それだけではない、論文や研究ノートなどもたくさん掲載することでもっと内容を充実させていこうと考えました。2 点目は、観光という点においてこれまで交流のあった私たちの大学院と立教大学の観光学研究科のより一層の研究交流というのがあります。コロナ禍においてみんながどう研究をしているのか、研究手法などいろいろな点において皆さんの現状を共有するという意図もあります。3 点目は、コロナ禍という歴史的な出来事・変動の中で皆がどのように生活をしているのか、生きているのか、という生活史的な記録を残していくということも大きな意義だと思っています。このように大きく 3 点の趣旨があるのですが、皆さん必ずしもこれに縛られず自由にそれぞれお話しいただければと思います。



鈴木　里奈
（北海道大学大学院
国際広報メディア・
観光学院）

岩本　晃典
（北海道大学大学院
国際広報メディア・
観光学院）

遠藤　理一
（北海道大学大学院
メディア・コミュニ
ケーション研究院）

――コロナによる日常生活の変化

斉藤　それではここまでがイントロのようなもので、ここから皆さんの座談会に入ってきたいと思います。はじめに、コロナによって皆さんの日常生活がどのように変化したかという点について、ざっくばらんにお話しいただければと思います。大きく変化したことや、あるいは実はそんなに生活は変わらなかったということでも良いです。たとえば私の話を少しするのであれば、私自身はコロナの登場と同時に博士課程も修了しポスドク（正式には特任助教）というポストに就いたので、コロナとは関係なく生活リズムや生活環境が大きく変わりました。研究室も個室をもらって、少し業務も割り当てられるようになったりするなど、そもそも生活リズムが大きく変わったので、コロナによって生活リズムが大きく変わったかというと、よくわからないというのが本音です。では普段の学外での友人関係等についてはどうかとなると、どちらかと言うと普段からインドアで内向的な人間なので、そこもそれほど大きく変わらなかったかなという印象があります。一番変わったのは、僕は市民運動のようなものにも携わっているのですが、その運営だったりイベントの開催方法だったりという点かなと感じていました。このように、皆さんの状況も聞きたいと思います。皆さんどうでしょうか。

遠藤　僕も斉藤さんと近いところがあって、去年度いっぱいで学振が終了する年だったんですね。なので今年度の前期は学振がなくなるということで、やばいやばいという気持ちがありました。そんな中、コロナで給付金がいろいろなところからもらえ、逆にそれで得したところもありました。コロナで大学での TA や RA も中止になるので、やばいと思ったのですが、学院の先生方から別の TA や RA の仕事をさせていただいたりもしました。こうした大学でのバイトと給付金を合わせると逆に経済面ではプラスになっていたかもしれないです。あと私たちの大学院でも、教員や同窓生の間で寄付を出し合って給付金として学生に支給したりしていたので、大学院生向けのサポートをすごくしていただいていたと思います。なので、コロナでなければ大学の外でバイトをしていたと思うのですが、それをせずに博士論文の最後のまとめ作業もできてしまいました。メディアでは大変な話ばかりを耳にしていたので、こんなんでいいのかなと思ったのですが。

岩本　僕はちょうど修士課程が終わったというタイミングだったので、斉藤さんや遠藤さんと似たような転換点という状況だと思っています。北九州市立大学への就職と北大での博士課程への進学が重なったので、九州までの移動についての制約にもとても不安を感じていました。職場環境も大きく変わって、本来だったら自分の立場として研究と教育を両立できる状況で採用されたんですが、すべてオンラインになって、授業が始まって半年間、一度も対面で顔を合わせたことのない学生にアドバイスしたりという状況で、オンラインコミニュケーションがとても増えたので、日常生活でも勝手に自分の中でミュートしていたりする時もあります。オンラインとオフラインが入り混じって、自分の中にオンライン文化が入り込んできたなという感覚があります。ありがたいことに職場がなくなってしまうという状況には見舞われなかったので、食いつなぐことができたのですが、これまでフィールドワークをやってきた人間としては、研究の手法をすっかり変えてしまわなければいけないのではないかという不安であったり、フィールドの人とのコミュニケーションも Zoom になったりなど、外に出て活動をして情報を収集するという自分の研究スタイルだったものを曲げないといけないのかなという不安と今でも戦っていると感じています。すべてがすごくオンライン化したという意味で、自分も 8 割ほどがオンライン上での活動という現場なので、ほんとに大きく生活が変わったなと思っています。

鈴木　私も節目ではありました。去年の4 月まではそれほど影響を感じていなかったのですが、4 月の半ばあたりで図書館が急に閉館してしまうという状況の中で、大学の近くに住んでいる意味がだんだんとわからなくなってきました。私の場合、大学と実家の距離が車で言うと片道 2 時間ほどという距離感なので、もう実家に帰ろうと決断をし、5 月に実家に帰ったというのがすごく大きな変化でした。月に7〜8 万円ほどのお金が浮くようになったんですが、逆に生活のメリハリがなくなってしまって、気分転換に出かける場所もなければ、人と話す機会も極端に減ってしまって、家族と朝と晩に話すくらいになってしまったので、結構精神的に辛い部分がありました。そして、実家が研究対象地の近くでもあるのですが、この状況で80歳を超えているおじいちゃんに会いに行くことはできないので、私も研究の手法を変えないといけないのかなと今でも思っています。金銭的には大きな問題はなかったのですが生活的にはあまり良くないような気がしているところです。

石野　僕のコロナの経験はフィールドワークでフィリピンにいるときにスタートしています。もっと前からフィリピンにはいたのですが、2020 年 1 月くらいからマスクをしている人が増えてきて、お店で買い物をしたり散歩のために外に出たりするのも少しずつ難しくなっていったりしました。3 月からはロックダウンが始まり、ただでさえ狭くてガスもないような部屋で生活をしていたのに、外に弁当も買いにいけない状況で、1 日カップ麺を 1 つ食べるだけで過ごした日もありました。肉体的にも厳しい極限状態で、研究のインタビューもできずその期間は壮絶でしたが、逆に言うと人類学をやっている身としてはそういう状況を経験できたのは良かったとも思います。それでどうにか 4 月に日本に帰ってきてからは逆にフィリピンとの対比で、自分の家ってすごく素晴らしいとか思っていました。生活全般としてはそれほど変わらなかったかなという印象ですが、よく悩んだのは、日常的によく連絡を取る社会人とかの同い年の友人や知人が、緊急事態宣言が出ても変わらず毎朝満員電車に乗らなければいけないこととか、飲み会を断れないこととか、書類 1 枚出すためだけに出張しなければいけないことなどの愚痴を漏らすときに、どう応答すればよいのかということです。こういうことを聞いているときにそれを止めることのできない自分の立場、行かない方が良いと言う事のできない立場にとても葛藤がありました。自分で考えて自分の身を守る判断をすることが大切だよ、としか結局は言えないのですが、一方でそうした判断が自己責任論につながったりしてしまうことに対して自分自身も批判をしているわけです。そうした判断を結局は仲の良い友達に勧めざるを得ないという難しい状況にとても葛藤がありました。生活は楽になりましたが、こうしたことに悩まされる機会やストレスが増え精神的には大変になったという印象があります。

中植　私は前提として「自分はけっこう恵まれていた」と思います。まず研究面では、修士二年目でフィールドデータもあり、執筆ができる状態であったということ、また経済的な面でもちょうど去年の間にお金を貯めていたため、その意味で「恵まれていたな」と思いました。それを踏まえたうえで、正直、「コロナ禍に対応する」ことは自分の生活として諦められて、むしろこの期間に「最大限甘やかそう」と、たとえば毎日お風呂の湯舟に入ったり、アロマオイルのやつを買ってみたり、自分の生活を楽しくするためのお金を使いました。時間としても、通学時間の分を睡眠に充てて毎日 8 時間寝たり。「今はあまりエネルギーがないけど、もうちょっとしたらやろう」と自由にできたので、今までやってみたかったことができたというのが個人的な感想です。

斉藤　ありがとうございます。一通りみ

なさんから日常生活の話を教えていただきました。いろんな話題がありましたが、皆さんの話はコロナの登場を境にした時の生活の変化というものだったと思います。ですが、コロナ禍になってもう一年経っているわけですよね。去年の 1 月・2 月ごろにニュースになってきて、そこから現在までの間にコロナの状況がよくなったか悪くなったかは判断しがたいと思いますが、このほぼ一年間の中で、コロナに対するスタンスみたいなものは変わったのでしょうか。また、その中での生活の変化などはあったでしょうか。個人的な話をすると、そんなにコロナに対するスタンスは変わらなかった。そもそも日常的に人と会うことが少なかったり、家と研究室という 2 つの領域で基本的に生きてきたのも理由かもしませんが。みなさんはどうでしょうか。

遠藤　僕は最初から今まで、コロナに自分が罹るのが怖いというのはないですが、人に迷惑をかけようとは思わないので人と会わないようにはするという感じで、「とりあえず気をつけるか」、「とりあえずみんなマスクをつけているからマスクをつけるか」みたいな感じで生活をしてきました。そうすると 5 月・6 月なんかは、外に行くのは、昼間に中島公園に散歩に行ってスーパーに寄って帰ってくるみたいのを一日一回というルーティンになりましたが、公園に来ている人はすごく多かったです。公園でウォーキングしたりキャッチボールしたりしている光景があって、それはけっこうおもしろかったです。みんな仕事が休みになっていたり家にいる結果、公園に集まってくるというのが。そういうのを観察するのを楽しんでいたのですが、一方でニュースとか SNS を見ると、そういう人を非難するような言葉があふれていたので、見ると罪悪感を感じるというのはありました。自分としては気をつけつつ自由に動きたいのだけれども、なんとなく周りの目が気になってしまうことがとくに去年の春・夏くらいはありました。

斉藤　コロナに対するスタンスや生活リズムの変化によって、人間関係が壊れたり新しくできたりするみたいなことがありますよね。研究対象者との関係にも、同じようなことが言えるかもしれません。

中植　監視の目に関して、最近 NHK の『“夜の街”で生きる～歌舞伎町・試練の冬』という特集をみていたら、「コロナは病気というよりも現象だ」という言葉がありました。自分が人を裁くための理由になる「免罪符としてのコロナ」みたいなものもたぶん生まれていて。人が人を分断していい理由なんてないはずなのに、それが横行しているなと思って。私は家にこもってそういう目を遮断できたけど、いろんな理由で外に出なきゃいけない人もいて。病気としてのコロナだけではなく巨大な現象として起こっていることに対して、「一歩外に出ると怖いな」と感じました。

岩本　免罪符という言葉が響いているんですけど、僕は逆に研究対象者との関係はコロナによって良好になった側で、けっこう高齢な方が対象地に多くて、過疎高齢化が進んでいる地域に行くので、僕自身は「コロナは危ないし、僕らが対象者に影響を大きく与えてしまうから、行かないように心がけます」と言っていたんですが、農村部にいる人たちの意識があまり高くなかったので、感染対策を十分にしたうえで、距離をとって対象者と向き合うことができた部分もあります。逆に、お祭りとかに、「若い人どんどんきて！」と言う側の人たちが多かったので、それを、コロナだからという理由で、ある程度の距離感を保ちながら研究ができたというところでは、一緒に研究するメンバーも含めて、対象地に行き過ぎないというか。本来なら理論とか研究したい日に、「行かなきゃいけない」みたいなこともあまりなくなってきたというか。「今の状況下難しいです」と言いやすくなったところは一方であります。その代わり、「現象としてのコロナ」に

対する雑駁とした不安がずっとあって、高齢な方とお会いすることへの不安感があるので、「来てもいいよ」と言われても、「何かあったらどうしよう」という葛藤がまだまだあるなあと思いました。免罪符って響きましたね。

中植　免罪符にして人を裁く人たちのことは、最初は理解できませんでした。でもそうして人を裁かなきゃ余裕を保てないほどの状況になっているのかなと思うようになりました。同じ状況だったら自分もそうなるかもしれない。そうしなきゃならないほどの苦しさは、きっととても悲しいです。

岩本　それで分断されていっているというか。スタンスという名の主義みたいなもので、本来重なってた部分がはがされたようなところもありましたね。僕の場合は良好に働いたんですけど。まったく別だったら対象地にも行けなくなったんだろうなと考えると、僕も人を裁くようになってしまっていたのかもしれないと思いましたね。

斉藤　不安があると、とりあえずそれを何かしらの形で解消しようとして人を責めたりすることはありますよね。経済的な不安だったりとか、諸々の不安から人を責めはじめたり。その中で同じ仲間を見つけるために、極端な意見とかを言うなど。「コロナはただの風邪」というのも一つのそういう形なんだと思います。

――コロナによる研究生活の変化

斉藤　話をみなさんの研究の方向にもう少し向けていきたいと思います。コロナのせいで研究テーマなどを変えなければいけなかったという人もいるかと思います。ちなみに僕は博士課程が終わった後は、LGBT の運動史のようなものをインタビューをメインに研究していこうと思っていたのですが、それがしづらい状況になったので、いったん、研究テーマも手法も変えることにしました。たまたま他にも関心のあるテーマがあったので、うまいこと僕の場合はスライドできたのですが、みんながみんなそうではないと思います。まず、研究テーマや手法を大きく変えたという人はいますか？

岩本　変わりました、だいぶ。資料分析とかを取り入れるようになりました。ちょうど今取り寄せたりしています。意識的にやったというよりは、それしか選択肢がなかったという苦肉の策です。サーフィンができないので。海とか地域の共有地を使うので、ローカルの制約を受けたり国の制約を受けたりするので、難しいなと思って変えました。

斉藤　元々フィールドワークで研究を進めていて、コロナの今でもそれで継続しているという方はいますか？

鈴木　いまあまりやってはいないんですが、私の論文は本当に質的調査で、人との対話がメイン、全部インタビューくらいの勢いで修論も書いたので、非常に今むずかしい状況です。とくに博論は修論の段階よりさらに深いライフヒストリー、その人の人生を全部聞きたいくらいの勢いで深めていって仕上げようと思っていたのが、「ライフヒストリーなんて」という状況になってしまったので、ここから大きく変えるか、状況が変わるのを待つか、非常に迷っているところです。フィールドの制限は私にはきつい状況です。

石野　僕もフィールドにいてナンボの分野なので、調査の方法という点ではお手上げ、どうしたもんかという感じですね。ただ少しポジティブな話をすると、自分の研究テーマをどう広い文脈で議論できるかを考えるときに、すごく視野が広がった気がします。僕のテーマは国際観光のためのビザを人々がどうやって手続きして観光する権利を得ていくのかのプロセスなのですが、まさにそれってコロナ禍の国境の封鎖とか、外出自粛とかの壁に対して、自分がどう観光できる存

在として自分を意味づけるのかという話とつながります。この観光する前のプロセスがすごく奥深く、色んな人間の実践とか制度とかが関わっている状況が日々勉強できるような環境でした。フィールドワーク自体は止まっていますけど、理論的なことや、自分の研究についてのイマジネーションはすごく広がっている気がしています。

斉藤　確かに、今までできた研究ができなくなったことで「じゃあどうやろう」と頭のなかからアイディアを絞り出さなければいけなくなった人は結構多いのかなと思いますね。そこから逆に新しい視点や興味が出てきた人もいたのかなという気がします。個人的な興味でお聞きしたいのですけれども、これまでインタビューやフィールドワークをメインでやってきた人のなかで、このコロナ禍に Zoom とかでインタビューをしたという人はどれくらいいますか？

岩本　はい。（挙手）

斉藤　岩本さんだけですかね。対面と Zoom でのインタビューでは、何か違いはありました？

岩本　まず対象者によって、そもそも Zoom にアクセスできるかどうかという問題があります。30 代や 40 代の方には「Zoom でいいですか？」「LINE 通話でいいですか」と聞いてすんなり対応していただけたのですが、最高齢で 75 歳の方と Zoom したことがありまして。その方とは、まず Zoom を使うマニュアルをこちらで作って、フォントサイズも 15 ポイントくらいの大きい文字で書いたものを郵送で相手に送って、そこから「インストールできたか」と相手に電話で確認して、その時に一緒に電話で Zoom の使い方を解説していく、というところから始めました。ですので、実際に Zoom がつながって、初めて画面上で対面できたときには謎の感動がありました。そういう意味では、もちろん対象者によって変わるでしょうけど、Zoom でも他人とつながること、顔を見せてつながることの手法的な意味での重要性に改めて気づきました。一方で、1 対 1 ではないインタビューの場合だと、どうしても僕だけが相手に話して、相手のみなさんが聞き手にまわる、ということが多く、非常に気を遣うところがありました。言いたいことをぎゅっとまとめる必要があったりとか、「これ言いたい」ということをそのタイミングで言えなかったりとか、対面よりも繊細だなという印象を受けました。

斉藤　話を深めるかどうかわからないのですが、個人的に非常に気になる点があります。すごくテクニカルな手法に関する話になるかもしれませんが、そして人によってやり方が異なるとは思うのですが、Zoom でインタビューを実施するときに、同意書のようなものはどうやってとればよいのかという疑問があります。インタビューするときには、毎回データの使い方を説明したりして署名を書いてもらうことが多いと思います。Zoom でインタビューしているというのは何度か聞いたことがありますが、同意書の説明や署名は具体的にどう行なっているのかというところが非常に気になります。すごく細かいところですが、岩本さんはそのあたりどう対応していましたか？

岩本　まず若い方が相手のときはスクショや、書類を電子化して送ってもらいました。75 歳の方のときはファックスでした。郵送がいいかなとも思ったのですが、時間がかかりますよね。そしたら相手から「家にファックスがあるから」と言われて、僕は家にファックスがないので職場宛てに送ってもらったりして対応しましたね。改めて、ファックスはすごく大事だなと思いました。そういった形で同意書については対応しましたね。

斉藤　ファックスですか。考えもしませんでした。ファックスなんてペーパーレスの動きのなかで批判されることがほとんどだと思いますが、こう役に立つこと

があるのですね。

岩本　まさかここでファックスというツールも使うとはという感じですね。Zoomとファックス両方の駆使でした。

斉藤　他のみなさんのなかで、コロナで研究が大きく変わったという人や、言い方が良いかわかりませんが、コロナの制約が結果として研究の方法やテーマにポジティヴに働いたという方はいますか？

中植　とても個人的な話しかもしれませんが、修士課程 1 年目のとき、週末になるとフィールドに出かけて現地の方と一緒にお酒を飲んだりして、その人の人生について聞いたりしてきました。そして修士課程 2 年目になり修士論文を執筆する段階に来た時に、フィールドの人たちの視点から離れられず、客観的に見ることが難しいと感じるようになりました。その時にコロナが来て、執筆もあるのでフィールドに行くことはストップとなったわけで。距離を取る必要があると感じていたときだったので、フィールドに行きづらくなってしまったことは、研究をする私にとっては良い方向に作用したとも思います。

岩本　すごくわかります。対象地にいたらどうしても自分が現地の人になったような気持ちになってしまって、サーファーの気持ちになります。ある意味、コロナを理由に「行けないんだ」という理由を作れるようになったので、いつも「行かなきゃ、行かなきゃ」と思い詰めていた自分には、こういったかたちで距離を取ることや客観視できる機会をもらった意味では同じような印象をもちました。

斉藤　フィールドワークってそこが難しいのかもしれませんね。対象者との距離や、自分が見ているものとの距離の取り方、自分がどれくらい対象地／者のナカに入るのか、そしてナカに入った後、どれくらいそこから離れてそれを眺めるのかといった距離のとり方。

――コロナと観光現象

斉藤　ではみなさん観光の研究をされているということで、コロナのなかでみなさんが気づいた観光現象の変化や、みなさん自身が観光というものをどのように見るようになったかという気づきなどをお伺いしたいと思います。これは余談かもしれませんが、バーチャルな観光というのがよりいっそう出てきたりしているのだろうか、と想像していました。僕はたまにGoogle Mapsのストリートビューでパリに飛んでみたり、北海道内をまわったり、いろいろなところに飛んで裏路地を歩いたりすることがあるのですが、そうした新しい動きが促進されていたりするかもしれません。またバーチャルではなくても、観光はいろいろな変化を見せていると思います。みなさんがこの 1 年のなかで気づいたことがあれば聞いてみたいです。

遠藤　それこそ先ほど中植さんが言われた、「コロナを免罪符にして他者を非難する」ときに、観光がその標的になっているなと感じる 1 年でした。不安なのはわかるんですけれども。あとニュースでGo To トラベルの参加者の何パーセントがコロナに感染したか、それは行かなかった場合と比較して何倍になるか、といった話が出てきていますよね。科学的な分析なので客観的に証明されている情報だということで、「観光というものはやっぱり良くない」、「政府がごり押ししているだけだ」という言い方が一定の説得力を持って出てきてしまいました。ただ一方で思うのは、そうした差別、人種差別であれジェンダーであれ、科学的な言葉を使いながら差別するということがあったと思うのですよね。その問題性を常識として学んでいる人が多いと思うのですけど、こういうパニックの状況になると科学的な装いが信頼されてしまうという側面を見てきたと思います。そもそも「観光客は危ないのではないか」という感情があって、それを科学で包んで出

してきているような。家族感染に関してはヘンな物言いもデータも出てきません。いかに観光客が今のマジョリティの外部、つまり自分たちを安全だとみなすときにそこに含まなくてよい存在として扱われているのかというところを見ていました。

斉藤　客観的なデータ以前に、危険な人と安全な人、危険な領域と安全な領域とが分けられたうえで、そこにバイアスを強化するようなデータが使われるということはありますよね。だから「ステイホーム」というものもいろいろなところで批判されていて、家にいれば安全だという言説がある一方で、家庭内暴力を受けている人にはそれがすごく危険であることが無視されていたり。ほかの方で、観光に関連して気づいたことはありますか？

石野　遠藤さんのお話を聞いて思いついたことが 1 つあります。僕はこの 1 年間常に不安に思っていたことがあります。それは、たとえば家族とか大学院以外の友人とかに何気なく、「結局 Go To トラベルは感染対策にとって良くないものだったの？」とか「結局、観光って危ないの？」といった質問をされた場合の不安です。そうした質問が 1 人の観光研究者としての自分に問われている以上は、自分が科学的な判断や説明をして応答していかなければならないと考えてしまって、そういった立場に置かれていることがすごく不安でした。実際にそのように聞かれたことはないのですけれど、もし聞かれたらどう答えたらいいんだろう、と悩んだ経験がこの 1 年間ありました。

中植　私も今の遠藤さんのお話をきいて思ったことがあります。これまでも自分の研究のなかで、観光を、楽しみで、不要不急で、余暇のための消費的な移動として捉えるだけではなくて、もう少し広く捉えてもいいのではないかと考えていました。たとえば誰かを「見る／見られる」という関係が観光の重要な特徴としてあるとしたら、たとえばこのコロナ禍に観光しに行った人をテレビを通してまなざして、彼らを自分のイメージのなかでジャッジしていく行為も、実は同じような「見る／見られる」のサイクルのようです。そう考えると、そこに違いはないかもしれない。やり方も目的も違うかもしれないけど、誰か他者を見て、自分の不安のために誰かを断罪していくようなことも、「見る／見られる」の関係性が悪い方向にはたらいた延長線上にあるのだとも考えられる。そういうところも観光研究としてはもっと力を入れて研究できそうだと思いました。そこには観光の可能性、怖さや影響力の大きさのようなものもあると思います。

鈴木　影響力の高さという言葉を聞いて思ったんですけれど、観光というものがすごく大きい括りで捉えられてしまっていますよね。それこそ Go To トラベルという言葉のなかには何が含まれているのか曖昧です。Go To トラベルの制度を利用して、観光ではなく普通にホテルに泊まりたい人が安く泊まるために利用するとか、商品券の関係で泊った方がお得になるとか、そういう利用が札幌のキャンペーンでもあったように思います。一概に Go To キャンペーンや観光と大きく括ってしまうこと自体が難しいはずが、さらにそこに「観光は悪だ」とか「だから感染者が増えるのだ」といった話が出てきてしまっている。それこそ中植さんがさきほど言っていた「夜の街」についてのテレビ番組を私も見ていたのですけど、悪者として扱われる「夜の街」は、その何を指して悪者だと言っているのか。テレビでも触れられていましたが、「夜の街」のなかでも全然違う営業形態がたくさんあるはずですよね。なかなか難しい問題ですよね。

石野　そう、その「なかなか難しい問題ですよね」という発言こそ、人文学的なことを学んでいる人が堂々と言わなきゃいけないことだと思うのですよね。「これは良い」「これは悪い」と結論を出す

ことがメディアでは求められるのかもしれないですけど、僕たちはやっぱり一歩立ち止まらなければいけないと、そうした態度で臨んでいる人が多いと思うのですよね。ただその一方で悩ましいのは、この感染症や、災害のようなことが起きてしまったときに、即座の判断や素早い分析が求められることがあると思うのですが、そうした状況でも同じような立場で居続けてしまってもよいのだろうかと、すごく悩みましたね。観光に対するまなざしや、研究者としての自分についてのまなざしについて、いろいろ向き合わざるを得ませんでした。

斉藤　難しいところですよね。それぞれの研究分野やテーマによって違うかもしれませんが、どこまで価値判断をするかというのは難しいところだと思います。研究はやればやるほど答えが出せなくなるというか、結論が結局あいまいなもので終わってしまうことも多いと思うのですが、そういうものは今の状況では求められていない。その時の研究者の役割というのは、特にこの緊急事態のなかでどうしていくかということにはジレンマがあるし、永遠の課題ですよね。

――まとめにかえて：今後の研究／生活の見通し

斉藤　では、まとめに行こうと思います。これまでの話では、今の時点で皆さんが感じたことや経験、ものの見方の変化、現象に対するコメントを共有したと思います。最後は皆さんの今後に関して話していただきたいと思います。今後、このような状況が続く中で、どのように研究していこうか、またどのように生活していこうかという点に関して話していただきたいと思います。

石野　そうですね。僕は研究というよりも、大学院生のコミュニティをどう考えていくのかという観点から考えていることを話そうと思います。僕の観点では、立教大学では、特にコロナ禍で入ってきた修士 1 年目の院生たちが個別化・個人化されてしまっている印象で、院生の同期や先輩とのコミュニケーションがうまく取れていないと傍から見ても思われる状況があると思います。一方で、僕のように博士過程も 3 年目になって観光や文化人類学などそれぞれのディシプリンで知り合いがいて、前からお付き合いさせていただいている人たちがいる中で、正直、今後もいろんな学会やその懇親会などZoomで気軽に参加できるので、オンラインという手段もありかなと手放しに思うこともあります。でも、これは指導教員とのゼミでも話題になったのですが、そうした態度はどこか問題があるかなと感じています。M1やD1などコミュニティに新しく入ってきた人たちは、いきなりZoomで懇親会があって気になる先生と話すとか、いきなりオンライン会議で新しい場所に入るのは難しいと思います。それをすでに対面でのコミュニケーションができている側の人たちが「じゃあ、Zoom でいいよね」と先導してしまうのは、少し問題があるよなと感じています。自分としては、これから、まだ知らない様々な研究をしている修士や博士の人たちへ手を伸ばして、積極的にコミュニティを自ら広げていくことを意識したいなと思います。それは、今後オンラインでしかインタビューできないときに、初対面がオンラインの対象者とのファーストタッチをどうするべきか考えるときのヒントになると思いますので、がんばっていきたいなという所存です。

中植　振り返ると、今年は特に、自分の 1 日を自分で組み立てて実践する 1 年だったと思いました。このような状況で自分を保つことができたのは、1 日をリセットする、切り替えるサインとしての「お風呂にゆっくり入る」や「アロマのにおいをかぐ」があったことが大きいと感じています。一旦止めること、終わらせることは自分の生活の中でも、そして自分の研究においても重要なことだったと思います。無限に続く生活ではなくて、何度も終わりがある、一旦止めてみ

るといったような生活の方法がある、と考えるのも面白そうだなと思います。

鈴木　そうですね。春からの研究はコロナをネガティブな観点で見てしまっていたので、今年はもう少しポジティブに考えて研究できたらいいなというのが一番です。オンラインでミーティングができるようになったので、こうして他大学の方々と話す機会が増え、研究のモチベーションが上がって助かっています。他にもプラスの側面があるので取り入れつつ研究していきたいです。あとは、同じ D1 の人と議論する機会がなかったので、自主的なゼミをしてみるとか、教員に頼るだけでなく自分からミーティングを開催していければと思います。また、気になることがあればできる範囲で研究室に足を運び、この状況の中でもできることを模索して、積極的にコミュニケーションを取って研究と向き合っていきたいなと思っている所存です。

岩本　僕は、この 1 年間を通して困難との向き合い方を模索していったのかなと思います。例えば、この非接触型検温器とかアルコール消毒液の霧吹きとかで、言い方はよくないんですけど、感染対策を「パフォーマンスする」というか、フェイスシールドとマスクを併用するだとか「ちゃんと感染対策をしていますよ」と世間に訴えかけることで、コロナ下での対面活動に対する世間の「まなざし」を緩和させていくことが必要かなと思いました。他者への思いやりをもって生活していることを見せることが大切だと思います。また、石野さんがおっしゃっていたように Zoom でのファーストタッチが難しい状況を緩和するために、一度は対面で話す機会を設けるなど、対面とオンラインの併用のハイブリット型で活動していくことが今後の研究に大切だと思います。この状況をポジティブに考えることができるように考えて行動していきたいです。今日はとても楽しかったです。ありがとうございました。

遠藤　僕は歴史研究で資料調査なんですけれども、そうとは言えど、ネットや図書館で入手できる資料というわけではなく、一昨年アメリカに行って手に入った資料があって成り立っているので、早くコロナが収まってくれないと困るなと思います。日常生活においても、旅行しづらい状況ですし、あらゆる施設が早く閉まり、とても大変でした。なので、コロナをポジティブに考えることはできなかった 1 年だったですね。今はこの状況に感じる鬱憤をためておこうと思います。コロナが収まったら「スゲー研究してやろう」と考えている所存です。

斉藤　皆さんありがとうございました。歴史研究とかではなく、現在の現象を研究している人たちは、どこかで必ずコロナという現象とかかわっていくことになると思います。その影響をどこまで自分の研究に組み入れるのか、コロナ禍で特定の現象を分析する時、どこまで「純粋な」現象が見られるのかというのが、みなさんのお話を聞いて気になりました。僕の研究対象である性的マイノリティの社会運動の一つに街頭でのパレードがあります。たとえば去年や今年のパレードを分析しようと思うと、パレードがコロナによって受けざるをえなかった何かしらの影響を、分析の中で考慮しなければいけなくなってしまうのかもしれません。「パレードの研究」がしたかったはずが、必然的に「コロナの研究」とならざるをえないのだろうか、などと想像をすると、研究とコロナの距離感もうまく考えていかないといけないのかもしれないと思いました。また、院生同士のコミュニケーションが希薄化しがちなのかなと思いますが、逆にコロナ下で Zoom などを使ってコミュニケーションを取れるようになったことで生まれた新たなコミュニケーションもあったのかなと思いました。ではこれで、座談会は終了したいと思います。皆さんありがとうございました。

（2021 年 2 月 5 日　Zoom にて）